



FTY 8008-PC7

7/4

日本国特許庁

公開特許公報

特 許 願

昭和48年10月31日

特許庁長官 殿
発 明 の 名 称

けい光体再生方法

発 明 者

住 所

千葉県茂原市早野3300番地
株式会社日立製作所 茂原工場内

代 理 人

吉 野 昭 司

特 許 出 願 人

(ほか 2 名)

住 所

東京都千代田区丸の内一丁目5番1号

名 称

(510) 株式会社 日立 製 作 所

代 理 人 吉 山 博 吉

代 理 人

住 所

東京都千代田区丸の内一丁目5番1号

株式会社 日立 製 作 所 内

電話東京 279-2111 (大代表)

氏 名

(7297) 特許 審 判 田 利



⑪特開昭 50-72884

⑬公開日 昭50.(1975) 6.16

⑭特願昭 48-121657

⑯出願日 昭48.(1973) 10.31

審査請求 未請求 (全3頁)

庁内整理番号

7158 4A

⑫日本分類

139C102

⑮Int.Cl?

C09K 11/00

明 細 書

発明の名称 けい光体再生方法

特許請求の範囲

ブラックマトリックス形カラー受像管のけい光面形成時に回収される処理液を水に不溶性または難溶性であるとともに比重が1より小さい性質を有する有機溶媒中に混合することによつて、前記処理液中に含まれるけい光体と黒鉛とを分離させてけい光体を再生するようにしたことを特徴とするけい光体再生方法。

発明の詳細な説明

本発明はけい光体再生法に関し、特にブラックマトリックスカラー受像管のけい光面形成時に回収される処理液中のけい光体を再生する方法に関するものである。

一般に、カラー受像管のパネルにけい光体を塗布する場合には写真法が用いられている。この写真法としては、けい光体に重クロム酸アンモニウムを含むポリビニールアルコールのような感光性樹脂を加えてスラリーを作り、このスラリーをベ

ネル全面に塗布した後、紫外線を露光して必要な部分のみを硬化させ、その後温水で現像することによつて所望のドット状またはストライプ状のけい光面を得るものである。この場合、必要な部分以外に塗布されたけい光体は現像腐蝕に含まれて除去されるが、この現像腐蝕内に含有するけい光体の量は使用されたけい光体の量の90%にも達するため、現像腐蝕内のけい光体を回収して再使用している。

しかし、ブラックマトリックス形カラー受像管のけい光面を形成する場合には、まずパネルに写真法によつて黒鉛のような黒色物質層を形成した後、けい光体をパネルに塗布している。このため、現像腐蝕に含まれるけい光体内にはあらかじめ塗布された黒色物質が剥離して混入してしまう。したがつて、現像腐蝕から回収したけい光体を再使用する場合には、混入した黒色物質がけい光面の均一性を阻害し、けい光面の質が低下する。そして、この黒色物質が混入したけい光体によつてけい光面を形成するとしても、露光の際の露光量が

多くなるとともにけい光体をベネルに被着させるに充分な接着力が得られず、このために作業性が悪くなる。

ここで、実際に黒鉛が混入したけい光体を再使用した場合の例を述べる。現像廢液内に含まれる赤色けい光体を遠心分離機によつて赤色けい光体のみ回収する。この場合、この赤色けい光体内には約30~50ミクロンの黒鉛粒子が混入していると同時に塗布機の使用および回収工程の際に混入する油脂とスラリーを構成するポリビニールアルコールとが約0.4%混入している。このため、再使用のために回収された赤色けい光体を乾燥した後、約420℃で120分間ベーキングを行ない油脂、ポリビニールアルコールを除去して粉末けい光体とする。この粉末けい光体に新たなポリビニールアルコールなどを混入してスラリーを作つたが黒鉛が浮遊した。この浮遊黒鉛を除去した後、赤色けい光面を形成したが、赤色けい光面内に多数の黒鉛点が生じて均一な赤色けい光面は得られない。

したがつて、本発明の目的は均一なけい光面を設けるため、黒色物質をほとんど含まないけい光体を得るけい光体再生方法を提供するものである。

このような目的を達成するために、本発明は有機溶媒を用いて黒色物質をけい光体より分離したもので、以下実施例を用いて説明する。

ブラックマトリックス形カラー受像管のけい光面形成工程の際に除去される現像廢液内には、黒鉛などを有する赤色けい光体が含まれているので、この赤色けい光体を遠心分離機によつて回収する。この後、この赤色けい光体100g、水450ccおよび酢酸イソアミル50ccの割合でガラス製分液ロート内に庄入する。そして、このロートを十分振動させる。この後、分液ロートを静止させると、赤色けい光体より親油性が大きな黒鉛が酢酸イソアミルを吸着して赤色けい光体と黒鉛は分離される。このとき、酢酸イソアミル自体は水に対して難溶性であり、かつ比重が1より小さいため、分離された黒鉛は水と酢酸イソアミルとの界面に浮遊してくる。なお、このとき赤色けい光

体は分液ロートの底部に沈殿している。つぎに、赤色けい光体をロートの下部より取出す。黒鉛を有する酢酸イソアミルおよび水を主成分とした洗淨液はろ過させて、黒鉛と酢酸イソアミルおよび水とに分ける。さらに、赤色けい光体内に残留する黒鉛を除去する場合には、上記ろ別した洗淨液内にロート下部より取出した赤色けい光体を再び庄入し、同じ工程を繰返すことにより赤色けい光体を一層高純度に精製できる。

ここで従来の方法で得た赤色けい光体の反射率と本実施例により得られた赤色けい光体の反射率を第1表で現わす。なお、ここで標準のMgOの白色を100%とした。

第 1 表

	従来例	実施例1回目	実施例2回目	実施例5回目
反射率	72%	79%	81%	82%

このように本実施例によれば水に対して難溶性であり、かつ比重が1より小さな酢酸イソアミルを用いて黒鉛と赤色けい光体とを分離したため、赤色けい光体内に黒鉛がほとんど無くなり、この

赤色けい光体を再使用する際新たにポリビニールアルコールおよび重クロム酸アンモニウムを混合させても黒鉛の浮遊はなくなる。したがつて均一なけい光面を得ることができる。

なお、上記実施例においては有機溶媒として酢酸イソアミルを使用した。本発明においてはこれに限定されることなく、水に対して難溶性または不溶性を有しかつその比重が1より小さな有機溶媒であればいかなるものでもよい。

さらに、上記実施例においては赤色けい光体について説明したが、本発明はこれに限定されず青色けい光体、緑色けい光体についても応用できることはもちろんである。なお、上記実施例の第1表とは別の測定値として第2表をつぎに掲げる。ここで反射率はMgOの標準白板を100%としたときの相対値を示す。

第 2 表

単位 (%)

	未使用の けい光体 の反射率	従来例にわけ るペーキング 後のけい光体 反射率	本発明による黒色物質と けい光体とを分離した後 のけい光体の反射率		
			1回目	2回目	3回目
赤色 けい光体	89	71	78	80	81
緑色 けい光体	91	71	80	81	82
青色 けい光体	91	65	76	79	80

以上説明したように本発明によるけい光体再生法によれば、水に懸濁性または不溶性を有しかつ比重が1より小さな有機溶媒と水とによつて、現像露光内のけい光体を高純度のけい光体と黒色物質とに分離することができたために、現像露光内のけい光体を何回再使用しても、均一なけい光面を得ることができるなど多くの効果を奏する。

代理人 井田士 澤 田 利

添附書類の目録

- (1) 明 細 書 1通
(2) 要 旨 1通
(3) 特 許 願 出 本 1通

7字用

1字用
1字用

前記以外の発明者、特許出願人または代理人

12字用

発 明 者

住 所 千葉県 茂原市 早野 3300 番地
カブシキガイシャ ヒダチ セイサクショ モバロコウジヨウナ
氏 名 株式会社 日立製作所 茂原工場内
佐々木 寛

住 所 千葉県 茂原市 早野 3300 番地
カブシキガイシャ ヒダチ セイサクショ モバロコウジヨウナ
氏 名 株式会社 日立製作所 茂原工場内
江 沢 忠 雄